

令和7年度保健消防委員会行政視察報告書

保健消防委員会
委員長 植 草 毅

【視察日程】 令和7年11月4日（火）

【視察委員】 委員長 植草 毅
副委員長 三井 美和香
委 員 石川 美香、黒澤 和泉、野島 友介、
前田 健一郎、石川 弘、小坂 さとみ、
酒井 伸二、中村 公江

【視察地及び調査事項】

千葉市立青葉病院

青葉病院の現状について

1 青葉病院

調査目的	青葉病院を視察し、現状や課題等について調査を行う。
視察概要	<p>1 調査項目 市立青葉病院の現状について</p> <p>2 対応者 病院局次長、青葉病院長、看護部長、事務長、医事室長、 病院局経営企画課総括主幹</p>  <p style="text-align: right;">【職員から説明を聴取】</p> <p>3 主な質疑応答（□：質疑、■：答弁）</p> <p>□眼科について、常勤医師が不在との説明を受けたが、現状が継続しているのか、また増員の予定があるのか。</p> <p>■眼科医師は以前常勤が1名在籍していたが、一昨年に退職した。現在は関連病院から非常勤医師が週3日午前のみ診療している。新患は受け入れておらず、院内紹介患者のみ対応している。近隣に眼科クリニックが多く、当院で眼科診療継続を強く求める声は少ないため、現状維持で診療を継続する方針である。大学に常勤医師の再配置を打診したが、良い回答は得られていない。</p> <p>□薬局視察時に薬剤の入手困難の話聞いたが、実際に薬が不足して困る状況があるのか。</p> <p>■薬剤については依然として品薄であり、入手困難な状況が続いている。卸</p>

業者への広範な連絡で在庫確保を試みているが、完全には対応できず、代替薬の使用など診療科ごとに調整を行っている。現状が長期化すれば医療現場の疲弊が懸念される。

行政として何か支援できることがあるのか

■問題は医薬品供給体制全体に起因するものであり、行政による業界全体への働きかけが必要であるが、相当なエネルギーを要するため、容易ではないと考えている。

救急車の不適正利用について、全国的に課題となっているが、現場の声を確認したい。

■当院では不適切な救急搬送はほとんど見られない。むしろ他院で受け入れ困難な患者が搬送されるケースが多い。現場から不適正利用の声は上がっていない。

寂しさから救急車を呼ぶ事例があると聞いており、現場では対応が大変だろうと懸念するが、どうか。

■消防局で救急問い合わせ対応を経験した際、寂しさから電話する事例があった。こうしたケースは不適正利用に該当するが、当院には回ってこない。

千葉市は広域連携体制であるため、市単独で有料化などの対応は難しいと思うが、千葉県への働きかけを検討したい。耳鼻科の診療室移動に伴う器具調達について、予算確保ができていますか。

■耳鼻科診療室の機器は、千葉大学からの人事決定後、委託費等の支出削減分を活用し、昨年度末に診察室1室分を予算内で調達済みである。

視察で修繕が必要な箇所を確認したため、予算要望があれば伺いたい

■患者への安全な診療継続のため、施設整備が喫緊の課題である。予算確保に協力をお願いしたい。

病院は開院から約23年が経過しており、良好な環境で長く利用するためには適切な修繕が必要であると考えている。議員側としても修繕への協力を行う。また、地域で病院の廃院危機が懸念されており、今後10年を見据えた病院存続のために、どのような差別化戦略をとるのか。

■千葉市には2病院があり、新病院の建設後5年以内に役割分担を明確化

する必要がある。近隣病院との連携強化と地域医療の新しい視点（急性期から在宅移行など）で議論を進めるべきである。当院の具体的方針は現時点で示せないが、連携と役割分担が重要であるとする。

□地域医療体制をしっかりと構築してほしい。財源投入も必要であり、全力で応援する。

□薬剤部で薬が手に入りづらい状況を確認したため、その要因について伺う。具体的には、物流の問題なのか、供給元の製造や提供体制に起因するのか、入手困難の原因を知りたい。

■薬剤不足の背景には複数の要因があるが、特に多いのは原材料への異物混入による生産ライン停止である。原材料が欠けると薬の供給が完全に止まり、改善まで使用できない状況になる。国内外の原材料供給に不純物混入が発生すると、安全策として薬の使用が停止される。この問題は薬剤供給体制全体の課題であり、医療機関側では解決が困難である。

□外来受付で説明を受けた際、建設当時と現在では医療需要が大きく変化しており、建物構造や配置に課題があると聞いた。今後の新病院建設において、柔軟性を確保する必要があるため、この変化の概要を詳しく説明してほしい。

■開院当初は外来ブースを広く確保したが、20年の経過で医療需要が大きく変化し、診察室不足が顕著になった。ドクター数は当初の倍近くに増加し、総合相談室を診察室に改装したが、それでも不足し、10数年で6室を追加した。一方で外科医は減少し、外科エリアを整形外科に転用した。眼科は常勤医が減り、診察室を耳鼻科に転用した。このように診療科構成は変化するため、将来を見据えた柔軟な設計が重要である。新病院では診療科専用ではなく、どの科でも利用可能な診察ブースを設けることが戦略となる。当院では改修は困難であり、現状でやりくりするしかない。

□千葉市の救急搬送時間は平均56分であり、関東政令市の中でも遅い傾向にある。過去に久留米市の事例を学んだが、関東圏でも改善が必要と考えている。特に滞在時間が30分かかる現状を改善し、市民が「良くなった」と感じられる状態を近い将来に実現してほしい。病院現場から見た千葉医療圏の最大の課題と、その解決策について伺いたい。

■千葉市の救急搬送は円滑に進まず、受け入れ病院が少ないことが課題である。特に忙しい時間帯や夜間は受け入れが困難である。体制強化が必要であり、当院としても協力体制を構築するために努力しているが、さらに

	<p>踏み込んだ対応が求められる。千葉市全体で救急体制を改善する必要がある。</p>
<p>主な 委員所感</p>	<p>○医師約 100 名、病床 369 床を有し、年間 5,000 件を超える救急搬送を受け入れているが、千葉市全体では救急搬送に要する時間が政令市の中でも長く、今後の改善が求められる現状である。</p> <p>青葉病院は第二種感染症指定医療機関として、結核や新型コロナなどにも対応できる体制を維持している。陰圧室 6 床を備え、一般病棟とは動線を分けるなど、感染防止対策が徹底されていた。感染症病床の確保と適正なゾーニングは、今後の新興感染症への備えとしても重要であり、継続的な支援が必要である。</p> <p>診療体制では、入院対応が難しい地域事情を踏まえ、耳鼻咽喉科を常勤 4 名体制に増員し、市民ニーズの高い分野を強化している点が印象的であった。一方で、眼科は常勤医が退職し非常勤対応にとどまっており、大学との連携による安定した診療体制の構築が望まれる。</p> <p>また、抗がん剤の調剤業務についても詳細な説明を受けた。薬剤部では、強い細胞毒性を持つ抗がん剤の安全な調整のため、専用キャビネット内で个人防护具を着用し、2 人 1 組で確認作業を行うなど厳重な体制をとっている。患者ごとにバーコードで照合するシステムも導入され、誤投与を防止する多重チェックが徹底されていた。抗がん剤は治療効果が高い一方で取り扱いリスクも大きく、こうした安全管理体制の維持は医療の信頼を支える要である。</p> <p>「病院の特徴を生かすためには、近隣病院とのすみ分けと連携が重要」との指摘もあった。青葉病院は急性期・感染症対応を強みとし、他の市立病院や大学病院と役割を明確化することで、地域全体の医療の質を高めることができる。救急搬送困難の改善には、病院間のベッドコントロールや夜間受け入れ体制の見直しなど、連携の仕組みづくりが欠かせない。</p> <p>老朽化した空調設備の更新や外来の混雑緩和など、施設面の改善も課題として挙げられた。青葉病院が地域の医療拠点として、市民が安心して受診できる環境を整えるため、今後の新病院整備や人員配置の充実に向けて、議会としても支援を続けていく所存である。</p> <p>○青葉病院は、昭和 13 年に市営伝染病院として設置され、第二種感染症指定医療機関として現在も感染症医療の中核を担っている。新型コロナウイルス対応では、延べ約 1,900 人以上の入院患者を受け入れ、千葉大学病院とともに千葉医療圏を支えた実績がある。</p> <p>診療面では、血液内科（骨髄移植）、甲状腺・副甲状腺センター、整形外科、全国的にも数少ない児童精神科など、高度で専門的な診療体制が整っ</p>

ていた。特に耳鼻咽喉科や皮膚科は、市内で入院対応ができる数少ない受け皿であり、地域医療における役割の大きさを再認識した。

薬剤部では、調剤の自動化やダブルチェック、防護服・閉鎖式キャビネットの使用など、患者の安全と同時に、調剤に従事する職員の安全確保にも最大限配慮されていた。一方、医薬品が全国的に品薄となり、綱渡りの在庫管理を強いられている現状が示された。原材料の海外依存や製造停止が背景にあり、医療機関単独では解決できない構造的課題であると感じた。また、手術部は限られた人員で効率的に手術を行い、病棟ではセンサーベッドの導入により転倒防止や迅速な対応が図られていた。入院患者が利用できるラウンジからは海が見え、患者が心を落ち着けられる空間づくりも行われていた。

一方で、開院から23年が経過し、空調設備故障や天井の雨漏り跡など、老朽化の課題が散見された。財政状況が厳しい中で、急性期機能を維持するための環境整備は不可欠であり、診療報酬制度や政策医療への支援強化が求められる。

青葉病院は、感染症対応と専門分野を両立する政策医療の最前線を担っている。市として、その機能が継続できるよう、設備更新の計画的実施や人材確保、医薬品供給の安定化に向けた国への働きかけ等が必要であると強く感じた。

○青葉病院の施設・設備・運営状況を調査し、今後の病院運営および地域医療連携に関する課題を把握した。開院から23年目に入り、施設の老朽化が顕著である。昨年にはボイラー故障が発生し、利用者への影響が出たことから、設備更新の緊急性が確認された。市民の安全と安定的な医療提供体制を維持するため、抜本的かつ計画的な改修の検討が喫緊の課題である。

視察では、薬剤室に導入されたアンブルピッカーなどの最新設備を見学した。これは調剤ミスを防ぎ、医療安全の向上と業務の効率化に大きく貢献することが見込まれる。今後も技術導入による安全性の向上を推進する必要がある。

地域連携室の機能を確認し、高齢化社会における退院支援の重要性を再認識した。急性期治療後の患者をスムーズに地域へ戻すための連携体制は、今後の地域医療需要に応える上で極めて重要であり、その機能強化が期待される。

青葉病院は、老朽化への対応と最新技術の導入、そして地域連携の強化という三つの課題に直面している。特に施設の計画的な改修は、地域の二次救急医療を担う中核病院としての機能を維持するための最優先事項であ

る。「築 23 年、まだ現役だが、そろそろオーバーホールが必要である」という視点で、今後の対策を講じる必要がある。

○開院から 23 年が経過しているということであったが、病院の努力により非常に大切に使用されている印象を受けた。最後に見学した地域連携室の重要性は年々増してきていると感じている。

月 600 人の退院患者を 5 名程度で対応していると聞き、予算・人員の拡充をしっかりと進めていくことが今後の課題である。

空調設備や病院のエレベーター改修など、必要なものには多額の費用がかかるということであったが、命を預かる施設にはしっかりと予算を付けていくことが議会の役割であると感じた。

○建築から 23 年を迎える中、冷暖房設備の更新等についての話を伺った。建物は築 10 年程度かと思っていたが、20 年を超えると多くの課題が生じると実感した。また、この病院の中で大勢のスタッフが働いていることを知り、驚いた。

市立病院として地域医療との連携、救急患者への対応など、幅広い分野で病院経営を行い、今後も地域の市民のために経営を続けてほしい。

○800 人近い職員が勤務する大所帯の病院であることを改めて認識した。

周辺の耳鼻咽喉科が閉院したことにより、青葉病院へ来院する耳鼻咽喉科患者が増加しているとのことである。恐らく、医院の高齢化等による閉院と考えられるが、高齢化と跡継ぎ不在問題が表面化している状況であり、ますます自治体病院の役割は大きいと感じた。

開院から 23 年目となる課題は設備の老朽化であるが、患者への負の影響を防ぎ、設備を維持するため、早めの対応を求めた。

地域医療連携室では、高齢者の受入と退院に関する課題を伺った。身寄りが無い、貧困など高齢者の課題に対し、適切かつ速やかな対応ができる環境への取組が必要である。搬送時から退院後の介護・生活支援を見据えたメディカル・ソーシャル・ネットワークを保健福祉局と連携し、有効な実効体制づくりが必要であるが、両局がどのように取り組んでいるかを確認したい。

青葉病院は、求められる地域医療の変化と「病院銀座」といわれる立地環境を踏まえ、10 年先を見据えた差別化と市民に喜ばれる医療の提供、そして持続可能性を視野に入れ、今から戦略を考える必要があると感じた。

○外来受付、救急棟、ICU/HCU、薬剤部、ボイラー室、感染病床、手術室、地域連携室等を視察した。昨年度に続き、2 回目の視察であったが、現場に行かなければわからない実際の状況や課題を知ることができ、有意義な視察であった。感謝申し上げます。

薬剤の品薄という課題、建設時と異なる数十年後の医療ニーズに基づく病室の配置、救急現場滞在時間の課題など、事情や背景を再確認することができた。

○青葉病院の取組を直接拝見し、地域医療の中核としての高い使命感と現場の献身的な努力を深く認識した。

充実した在宅医療、地域かかりつけ医との連携、救急・休日夜間における受入体制は、地域住民の「あんしん」を支える重要な柱として機能している。

一方で、月に退院患者 700 人の対応を少人数で担っている現状や、連携先のケアマネジャーの担い手不足への懸念は、医療・介護体制全体が抱える「人材確保」と「過重労働」という根深い課題を浮き彫りにしている。働き方改革が求められる中、この人員不足下での勤務環境改善は、待ったなしの状況にあると強く感じた。

また、ベッドセンサーのデジタル化をはじめとする医療の質向上とDX推進への積極的な取組は、今後の医療を支える重要な鍵である。特に、ICTを活用した業務効率化はスタッフの負担軽減に直結し、結果として人員不足の解消と医療の質の向上に繋がる両輪であると確信した。AIによる業務支援などは、今後注力すべき分野である。

さらに、高齢者への丁寧な対応や地域住民向けの健康講座といった活動は、病院が単なる治療の場に留まらず、地域の予防医療と健康増進を担う「灯台」としての役割を果たしている証である。

今回の現場での学びは、我々行政が描く施策と現場が直面する課題とのギャップを埋める貴重な機会となった。

○開院から 20 年以上経過し、不都合が生じているが、新病院でこれらの課題は解消される見込みである。ただし、新病院が完成するまで現病院は運営を継続する必要がある、現状を維持しながら対応してもらいたい。

空調設備の改善は評価できるが、今後長期的に現病院が存続する場合、さらなる課題が発生する可能性がある。そのため、議員側としても可能な限り支援を行う方針である。

病院内見学
の様子

